

－「密貿易」に関する口永良部島の実態編⑧－

野元新市

序論

大正9年に、川上久良氏¹が口永良部島へ来島し島の古老から口伝で、イギリス洋館の「密貿易所の跡」があり妾が存命だったと記録があり、55年前に一夜にして破壊された。何故か、銭屋五兵衛が捕まり牢獄で死んだからだ。銭屋五兵衛は「密貿易」で有名だが証拠はない。説はある。説を追いながら真実に迫って見たい。方法は、貿易であるからには、相手が誰で、何処から何処へ、何を輸出し何を輸入し、誰の懐に入ったか、そして技術的な事と物理的な事を図化しながら解りやすく解説したい。

第1章 「密貿易」の定義

広辞苑には、「法律を犯して密かに行う貿易」の事である。しかし日本は鎖国をしていた時であり「密貿易」等できる筈も無いが、薩摩藩は、実際に莫大な益を得て藩の財政を立て直しを行ったと言うのが通説である。徳永和喜氏によれば「薩摩藩の天保期の史料により密貿易の実態を調べると、薩摩とある藩の琉球口（進具）貿易の輸出品である俵物をいかに調達したかの密買の実態である」²、誰がどのように主導し、得られたものはいくらだったかを検証する上で口永良部島は「密貿易」とどう関わったのか事実を明らかにしたいと言うのが狙いである。

第2章 薩摩藩の「密貿易」の起源

2-1 貿易の口（港）は何処か

幕府から見ると薩摩は辺境の地で目の届かない所である。薩摩にとっては都合が良い。薩摩は江戸幕府以前から貿易や交流を行っていた。幕府は、長崎の出島だけで貿易を許可した。事実日本は「鎖国」状態であった。がしかし、日本には「四つの口」があった。「松前口」「琉球口」「長崎口」「朝鮮口」の開港地である。³ここでは「琉球口」について薩摩貿易の検証をする。

2-2 薩摩藩の借財

徳永和喜氏によると「1807年～1827年で、126両～500両の借金であった、理由は三つ、一つが将軍への輿入れと交際費用。二つ目が薩摩藩は三侯（藩主三人）いる。三つ目が重豪公子の養子縁組や婚姻政策」⁴とある。相当な贅沢であって三侯だけで、合計30万石、輿入れともなれば一人1万両ともなる。これでは仮に77万石と言え破綻する。

2-3 「密貿易」の首謀者

ずしょひろさと

調所広郷（1776年安永5年～1849年嘉永元年）は、島津重豪に抜擢された優秀な官僚で、亡き後は島津斉興の指示と了解で実行する。⁵知られているのは500万両を踏み倒した。と誰でも知っている事だ。薩摩藩の借財は、徳永氏の表によると「1616年2万両」⁶から始まっている。何故出来たのか大阪商人・江戸商人が余程善人だ

1 「密貿易所タリシ熊毛郡上屋久村、口之永良部島全図」 鹿児島県立図書館貴重資料

2 「海洋国家薩摩」 P101

3 海洋国家薩摩 P3

4 海洋国家薩摩 P135

5 薩摩藩の財政改革と調所広郷 P1

6 薩摩藩の財政改革と調所広郷 P135

ったのか、時代劇ではないが、商人はお金には厳しかったが権力には弱かった。徳永氏によると「大阪銀主に月に二朱、江戸金主に月に三朱の金利の引き下げ交渉をすると、金利は10年で2万9千両減り、差し引き8万7千両藩に残る計算になる」⁷と書いてある。すると商人達は金を貸さなくなった。藩財政の締め付けは増々厳しくなり、1.幕府から15万両を借りる。2.参勤交代を15年間しない。3.琉球と貿易をする。4.金を生まない事業はしないと書いてある。⁸ そこで始まる薩摩の大航海時代である。

第3章 薩摩の大航海時代

図1の説明をする。「三島村誌」⁹と「元禄国絵図」¹⁰を基にして作成した海路図である。海路図には、「航路」「天気」「潮流」「船の大きさ」など全て含めて航海図を作成し航行の安全を図らなければならない。

- は、「元禄国絵図」による「周路」である
大隅国山川港から途中大島を経て琉球国迄
- は、「三島村誌」より書きだした航路
- は、地図の上段から、三島(黒島・竹島・硫黄島)
右下は、熊毛(種子島・屋久島・口永良部島)
真中が、トカラ列島(口之島・中之島・臥蛇島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・子宝島)を七島灘と言った。最後に、宝島がある。トカラ列島のトカラとは、タカラが訛って言われようになった。¹¹
- は、「三島村誌」による貿易航路である。「西ルート」と「東ルート」がある。

以上、簡単な説明であるが特に強調したいのは、

- が、宝島から出発している。そして、—の「元禄国絵図」の周路が「口永良部島」と「屋久島」の間を航行している。

両航路とも「口永良部島」湊を利用している事である。この航路については、第7章で検証するのだが、今も昔も変わらない。何故ならば黒潮と海流と諸島と風向が変わらないからである。『海と人』によれば、「東島航海は現在我々が想像する以上に海上が安全であった。現在は風に逆らって進むが、むしろ自然な航海が行われた。朱印船貿易が危険な事業ではないと考えたればこ



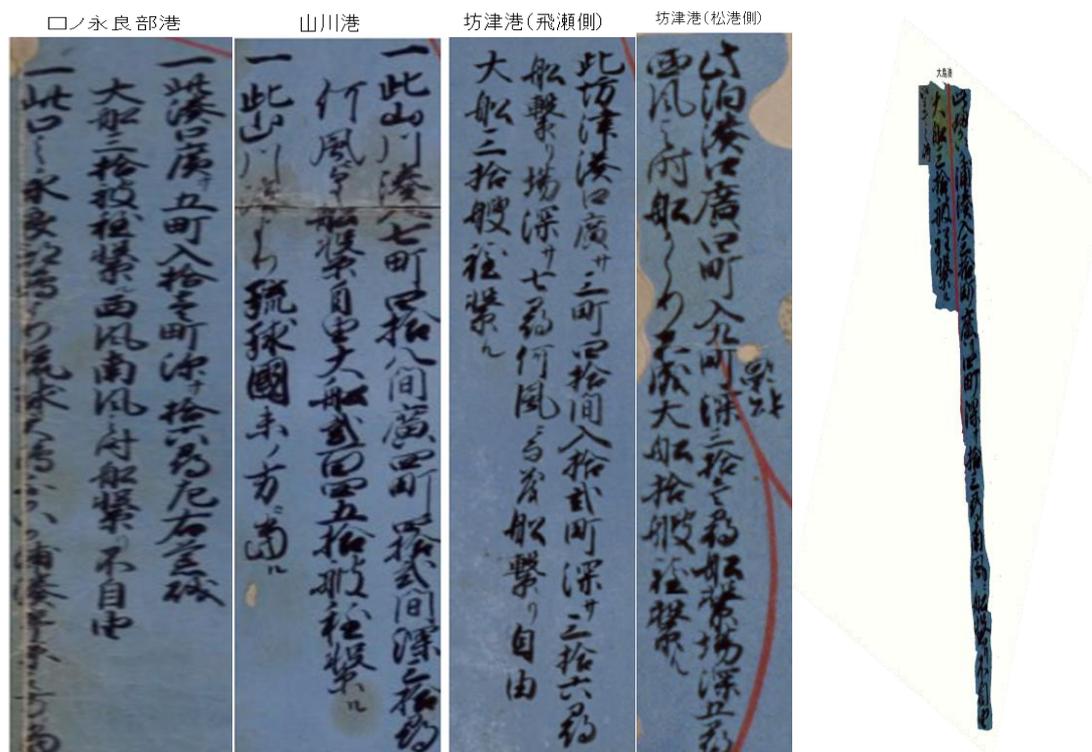
図1. 薩摩藩の大航海時代

7 薩摩藩の財政改革と調所広郷 P4
 8 薩摩藩の財政改革と調所広郷 P5
 9 三島村誌 P845~493
 10 国立国会図書館アーカイブより<部分的に切抜>
 11 三島村誌 P488

そ、当時の船舶金融が発達した」¹²とある。

3-1 「密貿易」の湊

「元禄国絵図」の口永良部港の文字情報を拡大すると



以上が、山川港・大島港・口永良部島港・坊津港の湊の大きさが記載されているので、整理したが解らないのがあるので○にした。

	口	入り	廣	深さ	船の大きさ
山川港	八七町	四拾八間	四町四拾三間	○○	大船貳百四五拾
口永良部島湊		拾〇町	五町	拾六〇〇	大船三拾
大島湊		三拾町	四町四拾三間	拾三〇	大船三拾
坊津港(飛瀬)		拾貳町	三町四拾間	三拾六〇	大船三拾
坊津港(松港)	〇町	九町		三拾〇	大船拾
口永良部(現在)	806m	1.16km	909m ²		
口永良部換算地		1.09km	545m	29m(尋時)	

表 1 元禄図の港測量値

表 1 によると、口永良部港は、山川港程ではないが、大島湊・坊津港と並ぶ程の「良港」である。「元禄国絵図」には、この五つの湊の大きさのみ記載がある事で重要な港であった事が解かる。大船が三拾隻入る港は表 1 にある口永良部島港である。何故重要であったかが理解できた。

第4章 「元禄国絵図」

4-1 琉球へ

「元禄国絵図」には、「口ノ永良部港ヨリ大島湊ヨリ間ふりいく浦、又口ノ永良部港ヨリ七嶋口ノ嶋」¹³とある。この事は「七島灘」の入り口の口ノ嶋を通る時と、大島経由で琉球へ航海することを意味する。ADACアーカイブより『日本輿地路程全図』¹⁴『第日

¹² 海と人 P13

¹³ 元禄国絵図 鹿児島県立図書館アーカイブ <口永良部島拡大周路文字確認>

¹⁴ 西尾市岩瀬文庫/古典籍書誌データベース 安永4年3月

本国郡與地全図』¹⁵『與地全図』¹⁶この3点の口永良部島からの航路文字には「是南百二十里琉球国」とある。上記どちらを航海するにも難を擁する場所で、「七島灘」は「七人衆」がいた。この連中は海の荒くれ者で「海賊」と呼ばれる事もある。薩摩藩は、「七人衆」に七島灘の道案内を依頼した。徳永氏によると「七人衆」とは、「慶長19年に琉球へ侵攻した時に水先案内人として島津軍を導いた海民であり、操舵術や航海術を持つ集団である」とある。¹⁷七島灘の人達は唐と既に貿易を手掛けており薩摩にとって都合の良い集団となった。その理由を徳永氏は「中国と貿易。藩が借財をした。琉球貿易を許可。琉球に居住させた」¹⁸とある。薩摩藩は「七島衆」を手名付ける事で唐（中国貿易）を優位にする必要があった。

4-2 大島湊へ

何故、大島湊へ航海なのか、勿論經由して琉球へ行く目的であるが、復路の黒砂糖の荷積みである。大島では黒砂糖生産が盛んで島の財政の殆どを賄っていた。台明寺岩人氏によると「薩摩藩は、生活必需品を藩で一括購入した。米作りを中止した。」¹⁹とある。又『昆布と富山売薬商』によると、「男は、15歳～60歳まで、女は半人前で、息の付く暇も与えなかった。黒砂糖をなめただけで鞭打。黒砂糖の出来が悪いと首枷や足枷の刑を与えた。奴隷労働以外の何物でもない」²⁰とある。薩摩藩は、大島の黒糖が何故黒色なのか本当の意味を知らない。あの黒色は、血が黒くなったものであると私は理解する。天保年間の10年間で搾取した結果である。

改革前				
生産高(斤)	樽(艇)	樽1艇(斤)	代銀(両)	改革前(両)
5,202,323	40,963	127		
年平均		18反帆	年	
12,000,000	95,000	80隻	2回往復	1,366,000
改革後				
120,000,000			2,350,000	

表2 黒砂糖生産額の比較

又、七島灘コースは、『朝鮮琉球全図』²¹と『朝鮮琉球蝦夷並ニカラフトカムサスカラッコ島等数国接壤ノ形勢ヲ見ル為ノ小図』²²にも航路がある。16は、常平通宝（1633）時代とあり、17は、天明5年（1785）とある。徳永氏によれば「島津義久氏が、天正11年（1583）に山川港を拠点港としたとあり。又島津以久に、応永15年（1408）には屋久島・口永良部を領有した」とある。²³

第5章 薩摩藩と諸島

5-1 「輸入品」と「輸出品」

表3によると対外貿易と対内貿易がある。対外貿易とは、東北の松前口より昆布を運び中国に輸出する「昆布ロード」である。中国が昆布を欲しがったのは、『昆布と富山売薬商』によると、「風土病（ヨード不足から甲状腺が肥大し癌になる）が流行っており、

¹⁵ 古地図コレクションアーカイブ 嘉永2年

¹⁶ 西尾市岩瀬文庫/古典籍書誌データベース 「天明六丙午春」の文字

¹⁷ 海洋国家薩摩 P62

¹⁸ 注17

¹⁹ 斉彬に消された男 P64-65

²⁰ 昆布と富山売薬商 P86

²¹ 国立歴史民俗博物館データベースより

²² 国立歴史民俗博物館データベースより

²³ 海洋国家薩摩 P73

昆布にはヨウ素が豊富に含まれていて、昆布は食べ物ではなく薬であった。」²⁴もうひとつは、大島で搾取して得た黒砂糖を大阪や江戸で売買する。又中国から輸入した唐物を大阪・江戸で売買もした。問題は、日本の最北から最南までを、幕府から見たら辺境の地とまで言われかねない薩摩藩が何故財政難の中で貿易ができたのか。

場所	輸入品	場所	薩摩藩	場所	品物	売買先(大阪)	売買先(江戸)
中国	唐物	琉球	唐物	薩摩	唐物	唐物	唐物
		大島	黒砂糖	藩船・商船	黒砂糖	黒砂糖	黒砂糖
場所	輸出品	場所	薩摩藩	場所	品物	売買先(大阪)	売買先(江戸)
松前	昆布	大阪	薩摩藩	坊津・口永良部	昆布	琉球	中国
			昆布・売薬				

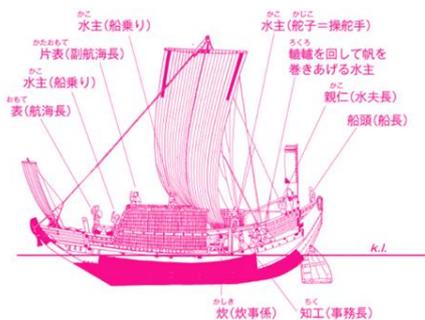
表 3 輸入品と輸出品

5-2 「搾取品」と「益」

薩摩藩には「薩摩組」がいた。此処が薩摩の賢い処である。藩の直接の拘わりを否定するために組織を作ったのである。『昆布と地山売薬商』によると、「薩摩国で行商をする売薬商のことを薩摩組と呼ぶ」²⁵とある。「薩摩組」を巧みに使って密貿易を実地するわけであるが、全国組織であり薩摩・大隅・日向と 26 地区に 26 人に担当者がいた。薩摩藩は「薩摩組」を優遇したうえで、融資をし、しかも船を作らせ貿易拡大に乗り出すが、幕府としての入口は長崎であるので、「天保 7 年（1836）唐物抜け荷、倭物密売を厳禁する命令を出した」²⁶とある。そこで表で薬の行商をしながら薩摩藩のスパイ活動をしたのである。「薩摩組」の存在については、徳永氏によれば、調所広郷から島津斉彬死後、斉彬を尊崇する西郷、そして大山県令に引き継がれ、調所に関する文書・記録の焼毀によって彼の偉業は歴史の中に封印された」²⁷とある

第6章 帆船と貿易船

6-1 舟の形



・北前船 「千石船」

150 トン

1 反帆

11 ~ 13 人

大阪～江戸往復 30 ~ 40 両

「船主の 1 割が積める」



・将軍御座船

500石(6.75トン)

75トン

全長 3.4m、小櫓 76 挺立・1

反帆

²⁴ 昆布と富山売薬商 P 84

²⁵ 昆布と富山売薬商 P 82

²⁶ 昆布と富山売薬商 P 88

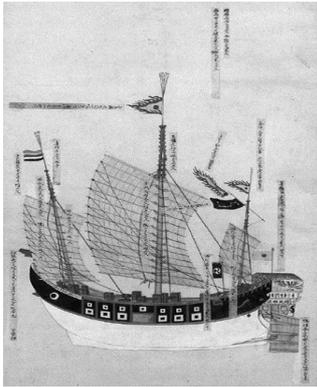
²⁷ 海洋国家薩摩 P 148



・琉球船
 600石(8.1トン)
 48人
 20間(36.4m)
 6間(10.92m)

朱印船の大きさ			
朱印船	大きさ	72トン	天竺暹羅
大船	五六十萬斤		百萬斤
	七八十萬斤		百五十萬斤
小船	十萬斤		八二百萬斤
日本	十六七端帆以上		
	二十端帆以上		
南京	小船		

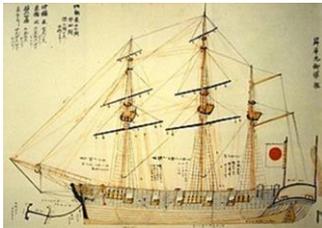
海洋国家薩摩 P 48-49



・進貢船
 船身 11丈5尺(34.8m)
 3丈2尺(9.7m)



・昇平丸
 370トン
 17間(31.0m)
 4間(7.3m)



・旭日丸
 750トン
 23間1尺(42.3m)
 5間2尺(9.7m)

用語説明

・石とは、薩摩藩であれば77石と言う具合に藩の国力を表す。1石=100斤
 明治は1石=米1俵=4斗=2.5俵=180_リ斗=278_リ斗=278kg
 ・町とは、3000歩(坪)、1反=300坪、1畝=30坪、1歩=1坪
 ・間とは、6尺=1.8m 1寸=3cm
 ・里とは、4km
 ・ノットとは、1.852km/h
 ・大船とは、6反帆以上
 ・小船とは、6反帆以下
 ・瀬とは、帆の無い船2石 1反=1反=30石積
 ・イサバ(使途呼称)船とは、薩摩では鯉船で、7反帆、10尺(3m)、50尺(16m)

『上屋久町誌』によれば、「この時代一般的に使用されていた「大船小船石数寸法書」では、百五十石は九反帆、三百石積は十三反帆、七百石積は十八反帆、千石積は二十一反帆であった」²⁸とある。表4は、26をまとめたものである。『上屋久町誌』によると、「御用木船は、役人が通常使用した」とある。御用木船は四帆船であった。又「寛政6年には、大量に積んだ琉球船を助けるべく、中世以来琉球・道之島からの積登し船の航路に近く」²⁹とある。『近世日本海海運史の研究』によれば、「天保3年(1832)に、400石の廻船購入する」³⁰とある。「薩摩組の能登屋の所有船は、長者丸650石積と栄久丸400石積である。」³¹とある。と言う事は

種類	石積
瀬	2石積
二枚帆船	10石積
九反帆	150石積
十三反帆	300石積
十五枚帆船	450石積
十六枚帆船	460石積
十八反帆	700石積
二十一反帆	1000石積

表 4 反帆と石積

²⁸ 上屋久町郷土誌 P 219

²⁹ 上屋久町郷土誌 P 221

³⁰ 近世日本海海運史の研究 P 195

³¹ 近世日本海海運史の研究 P 197

北前船は、400石積～700石積の十八反帆以上であった事が解かる。これで薩摩の坊津、又は近海迄来て受け渡しをした。荷受場所であるが、「坊津沖・口永良部島」³²とある。『九州水上交通史第五巻』によると「表2の通り薩摩船の琉球渡海状況は、乾隆33年(1768)には、種子島が圧倒的に多く屋久島・坊之津・小根占・志布志・泊である」³³となっている。宝暦2年(1752)の領内港出入船舶について、『海洋国家薩摩』によると「藩の御用船主32名の連名押印を船奉行に提出した帳簿である。薩摩藩の天保の改革は調所広郷の功績による事は知られているが、各港の各況は調所による黒砂糖専売制と上方・江戸への廻米などで藩御用船としての雇船の必要から生まれた」³⁴とある。此処で山川が圧倒的に多いのも山川港が「良港」であったからである。時代は幕末から明治へと変わる。島津斉彬の時代であり西郷隆盛や大山綱良が活躍の舞台となる。時代は近代化の波を受けて薩摩藩は中央集

	京泊	方浦	坊津	山川	大泊	内之浦	柏原	志布志
大船	300	30	30	245	30	50	5・6	
船数	57	48	72	225	23		104	117
6反帆以上	3		13	11	なし		9	10
5反帆以下	45		14	56	12		31	60
漁船	9		45	58	11		64	40

表 5 領内港船舶数

権国家の主導者となる。スタンフォード教授西悦夫氏は、「維新の男達は、”俺達やればできる”と思った青年はイギリスになりたかった」と言われる。その通りである。その後、国船と商船を競わせて両方沈んでいく時に大久保利通は、「もう止めよ」と言った。西氏曰く。

6-2 舟の周路

図1のように「西ルート」「東ルート」「元禄国絵図ルート」があった。「元禄国絵図ルート」は途中大島へ寄っている時もある。何故なら大島への記載があった。表6は、嘉永2年の日本国郡輿地全図で、「口永良部島から琉球へ120里」と記載がある事からも口永良部は「良港」であった。又日常的には、イサバ船が使用された。表7がそうである。鹿児島探検の会東川氏より「西郷隆盛が、1回目の流刑の時に使用した船は、イサバ船であった」と聞いた。表5は、坊津町は、商船が減少し水産業へと転換する時に大活躍する船である。

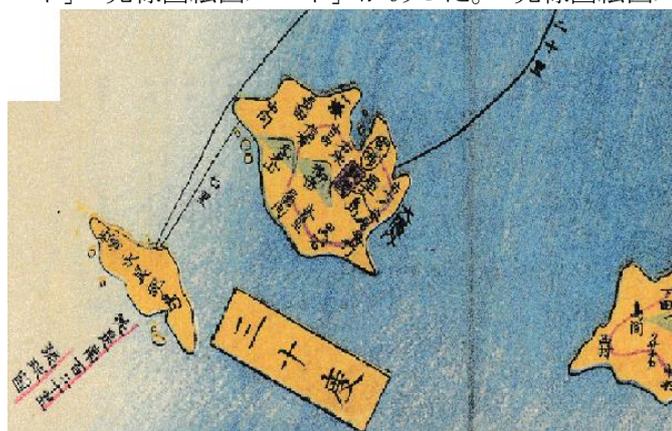


図 2 日本国郡輿地全図 (嘉永2年)

口永良部島にも鯉船が操業している。口永良部ポータルサイト³⁵によれば、「文政5年(1821)の「諸国鯉節番附表」には、薩摩が大関」である。口永良部島には、「島イデ」があった。「島イデ」とは、鯉を燻すことである。数軒とあったと古老から聞いた。

第7章 航海の海図

航海に、海図もコンパスもない時、海の男達は、薩摩から150里(600km)の航海を、往路は、

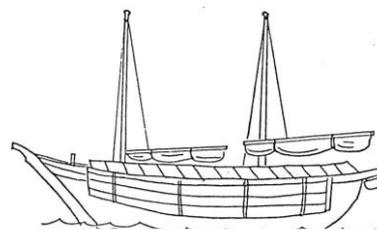


表 7 イサバ船(坊津町郷土誌よ)

³² 海洋国家薩摩 P93

³³ 九州水上交通史 P302 表2

³⁴ 海洋国家薩摩 P98-99

³⁵ 口永良部島ポータルサイト https://kuchinoerabu-jima.org/history.html#history_1

屋久島と大島を目印とし、復路は、宝島と大島・屋久島を目印に航海に出た。これから実際に仮定して航海を試みる。ただし条件として三つを上げる。

- ① 時期 春 夏 秋 冬による風向と風速
- ② トン数
- ③ 潮流

である。

さあ山川港から琉球へ向けて航行開始とする。

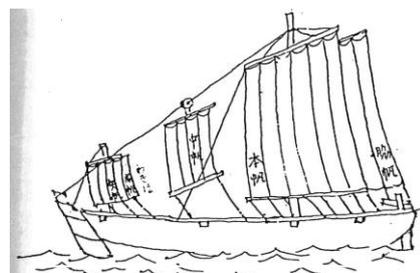


表 8 帆船時代の艦船

(明治30年頃 坊津町郷土史より)

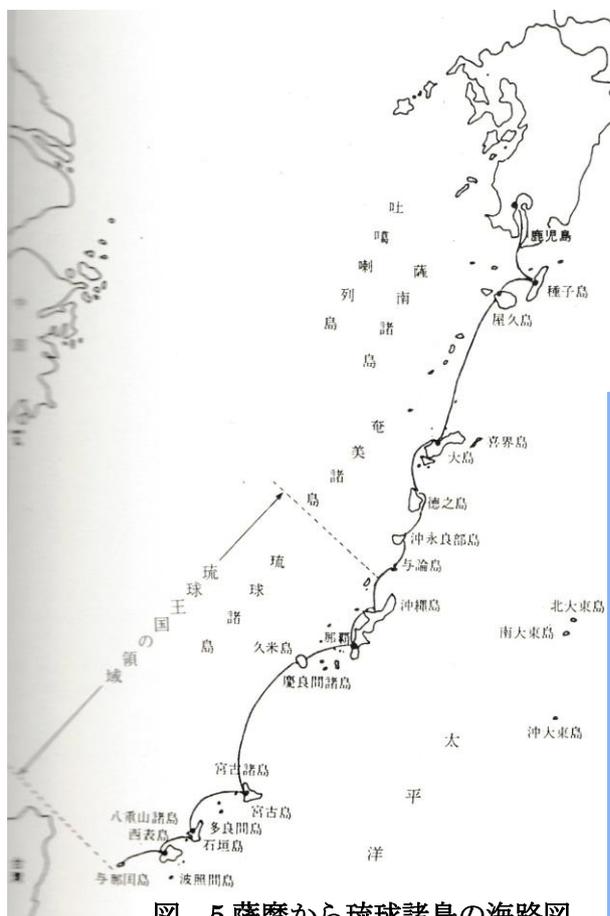


図 5 薩摩から琉球諸島の海路図



図 6 鹿児島から沖縄への

航行計画は、図 7 より、現在南日本汽船(株)が、赤航路が江戸時代の航路と同じである事に気づいた。と言うのは、トカラ諸島の西ルートと屋久島・口永良部島手前より志布志に向かう航路であるがヒントがある。南日本汽船(株)船舶課によると「赤線航路を帆船で航行するのは今よりも難しかったであろう。△波がでる。徳之島付近の潮目等は随時データを見ながら航行する。又11ノットの舟が14ノットになることもある。帆船はポールの高さによっても上に風が強いとひっくり返りかねない」³⁶とのことであった。聞取調査で分かったのは、距離と船の大きさと潮流と風向によって命がけであった。

[うずりん 21]

船舶種別	貨物船
全長	142.00m
総トン	5848G/W
速力	20.5ノット
運行時間	20時間

³⁶ 南日本汽船(株)船舶課より聞き取り調査

第8章 口永良部の「密貿易所」

8-1 口永良部島の位置

口永良部の隣は九州一高い山がある琉球からは見えないが、大島までは島々を回り黒砂糖を積み込む。大島からも途中は寄るが目指すは屋久島である。『南日本汽船(株)船舶課』によると、「ポイントを目指して航行しているの、屋久島が見えるのは、解らない」³⁷と回答、又南大隅町観光課によると、「よっぽど天気の良い日でないと見えない、年に2回ぐらいで夏である」³⁸との結果、灯台の無い時代であるので、薩摩藩雇船は屋久島を目指したのは間違いない。がしかし条件と天候により一湊と口永良部港を選択した。

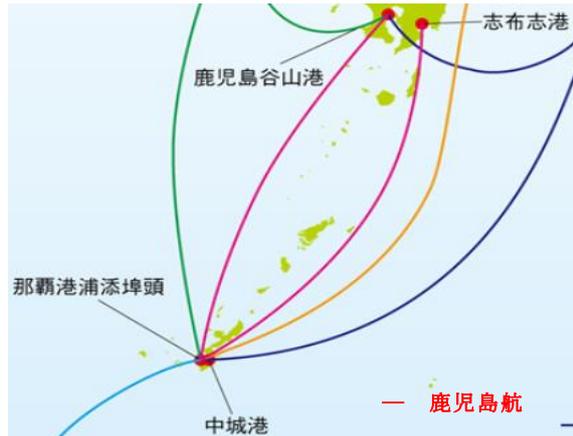


図7 南日本汽船(株) うりずん 21 (鹿児島)

8-2 川上久良とその他説³⁹

名前	書籍名	出版年	期間	内容	否定・その他
川上久良			大正8年9月	口伝・現地調査・密貿易跡	
川島元次郎	南国史話	大正15年5月		川上久良図発表	川島節
鍋木勢岐	書籍	1921年		銭屋五兵衛の研究	川島節承認
川越政則	書籍	昭和25年		南日本文化史	1950年
銭五顕彰会	論文	1954年		銭屋五兵衛の研究	
法政大学	論文	1984年		年々留一銭屋五平衛日記	
若林喜三郎	書籍	1987年12月		新版銭屋五兵衛	川島節否定
遠藤雅子	書籍	1993年		幻の石碑～鎖国下の日豪関係	
木越隆三	書籍	1997年		銭屋五兵衛と北前船の時代	密貿易否定
小越隆三	書籍	1997年		銭屋五兵衛と加賀の豪商たち	一部密貿易否定
深井甚三	論文	2008年		銭屋五兵衛と抜荷	

図8 口永良部跡密貿易に関する諸説論文

図8に関しては、様々な説がある。川島説を容認するかしないかである。そして新しく銭屋五兵衛の密貿易があったのか、又薩摩まで来たのかと言う事であるが確認には至っていない様である。ここでの問題は、川上久良の調査のけた、「死後すぐに一夜にして取り壊された」とある。深井甚三氏によると、「薩摩藩の抜荷が盛んに行われていた時期の天保年間に五兵衛も蝦夷地で昆布買い付けを行っていることは確認できる。しかしその昆布を薩摩へ運んでいたことを示す史料は残念ながら確認できていない」とある。ならば口永良部島へ来ていたのだろうか疑問も残る。又『琉球・薩摩交流史の痕跡』によれば「藩庁貿易船はトカラ列島で沈没したが何処へ向かっていたのか、英国人の行っていた密貿易所は、「白糖方」とも呼ばれていた」とあるが、役所だったのか、又「元禄国絵図」には異国船遠見番所が描かれているが、薩摩のこの関係は事実の密貿易の実態であろうか。

8-3 「密貿易跡」の結論

薩摩藩は、藩を上げて密貿易を行っていた。しかし銭屋五兵衛が口永良部島まで来たかどうかは確認できない。異国船が入港するたびの島の人々の生活はどうだったか記載がない。「良港」であったことは事実であるので、「周路」として活用されたのだろう。そこ

³⁷ 南日本汽船(株)船舶課より聞取による。

³⁸ 南大隅町観光課より聞取による

³⁹ 近世日本海海運史研究 P163-228 図8は注も利用している

で、疑問は西郷隆盛が、遠島の時に口永良部島により風呂にも入っている。⁴⁰又名越左源太も遠島になった時に口永良部島に寄っている。⁴¹気づかなかつたのだろうか、恐らく知っていたのだろうと推測する。理由は島津斉彬から続く勲等である。

8-4 「宝島」と「口永良部島」石高

図9より三島村（竹島・硫黄島・黒島）の石高は、101石である。トカラ列島・七島（口之島・中之島・我蛇島・諏訪瀬島・悪石島・平島・宝島）合計で816石であり、特に宝島は二分の一を占める。宝島と口永良部島がベスト1・2である理由は、両方共密貿易の航路の終始である。

口永良部島	184
硫黄島	36
竹島	20
黒島	45
口之島	110
中ノ島	82
我蛇島	3
諏訪瀬島	127
悪石島	35
平島	75
宝島	395

図9 石高の比較

第9章 結論

口永良部の密貿易の歴史と経緯を川上久良図を基に検討してきたが、前章にもある通り史料の消滅があり事実は確認できないが密貿易があった事は事実としても「白糖方」と呼んでいた。秘密裏に行っていた訳ではなく幕府も公認・藩も公認の中でやられていた事である。

第10章 小括

最後に、様々の史料の中で限られたものしか見る事が出来ず残念に思う。時間的な制限の中で趣味の領域での検証に留まる。だから、もう少し丹念に調べたいものがある。①川上久良文献史料の整理をしなければならない。②調所広郷→島津斉彬→西郷隆盛→大山綱良、そして池上四郎と有川矢九郎について人間関係をまとめる。特に有川矢九郎は、船奉行、軍艦奉行で船長であった。西郷隆盛の2回目遠島帰還の時の胡蝶丸の船長でもあった。海の男であり、南西諸島を知り尽くした男と島津又七の手紙が、「明治2年3月2日 島津久壽より有川矢九郎宛」⁴²がある。『日置島津家と西郷』によると、「調所広郷の死は高崎崩れの前哨戦とて極めて重要な意味をもっている」⁴³とある。

参考文献

1. 徳永和喜. 海洋国家薩摩. 2011年4月20日.
2. 川上久良. 密貿易所タリシ熊毛郡上屋久村,口之永良部島全図.
3. -. 錢五の密貿易船の行方を尋ねて. 大正15年5月.
4. 深井甚三. 錢屋五兵衛と抜荷. 2008年.
5. 友野春久. 敬天愛人 22号<薩摩藩密貿易と西郷隆盛の密貿易対策を含めて>. 出版地不明: 西郷南洲顕彰会, 平成16年9月24日.
6. 深井甚三. 近世日本海海運史の研究. 2009年1月10日.
7. 上原兼善. 鎖国と藩貿易一薩摩藩の琉球密貿易一. 昭和56年11月20日.
8. 徳永和喜. 調所広郷が育てた海商濱崎太平治と藩武器調達. 出版地不明: 敬天愛人 第30号, 平成28年9月24日.
9. 友野春久. 池上四郎貞固系譜一薩摩藩密貿易と西郷隆盛の密貿易対策について一. 出版地不明: 敬天愛人 22号, 平成16年9月24日.
10. 原口虎雄. 幕末の薩摩一悲劇の改革者、調所笑左エ門一. 昭和41年4月20日.
11. 台明寺岩人. 斉彬に消された男一調所笑左衛門広郷一. 2006年12月19日.
12. 鳴海章. 薩摩組幕末秘録. 2006年9月30日.

⁴⁰ 敬天愛人 第31号 西郷隆盛佩刀伝授記 P295

⁴¹ 遠島日記 P434

⁴² 東京大学編纂所 永吉文書<島津久壽より有川矢九郎宛>より

⁴³ 日置島津家と西郷家 P1

13. 柚木学. 九州水上交通史. 平成 5 年 6 月 9 日.
14. 藤田元春. 日本地理学史. 昭和 17 年 12 月 10 日.
15. 津波清. 竜国絵図と近世の交通事情. 出版地不明 : 沖縄県立図書館史料編集室紀要 (19) 55-80, 1994.03.30.
16. 住田正一. 海と人. 出版地不明 : 平凡社, 昭和 19.
17. 上屋久町長. 上屋久町郷土誌. 昭和 59 年.
18. 徳永和喜. 西郷隆盛佩刀伝授記. 出版地不明 : 西郷南洲顕彰会, 平成 25 年 9 月 24 日." 敬天愛人 第 31 号.
19. 谷川健一外. 遠島日記(名越左源太). 1972.7.15.
20. 三島村誌編纂委員会. 三島村誌. 1990.
21. 山下正盛. 永吉(村)郷土史. 出版地不明 : 永吉南郷会, 2005.4.
22. 木原三郎. 日置島津家と西郷家〈敬天愛人第 16 号〉. 西郷南洲顕彰会. 平成 10 年 9 月 24 日